

「新年の抱負」

新

しい年が始まるということで、自分の出しているごみの量を減らすことを新年の抱負にしたいと思います。

そう思うようになったきっかけは、数カ月溜まったごみを分別していたとき、そのごみの多さに驚いたことです。母国のオーストラリアでは、ごみ・資源の収集は週に1回で十分と思っていましたが、大府市のように可燃ごみ収集が週2回も行われていると、家にごみが溜まってしまおうという心配がないので、すばらしいことだと思えます。しかし、ごみを出す機会が多いことで、自分の家庭がどれだけのごみを作っているかを意識しなくなっていました。

私のごみコレクションが拡大する主な原因は冷凍食品と菓子依存症にあることでしょう。冷凍食品を食べなければ、私が出しているごみの量は確実に減りますが、日本の冷凍食品はとても美味しいのでやめられません。もう一つの好物であるチョコレート類は小さいので出るごみの量は、少ないと思われるかもしれませんが、菓子類の包装はオーストラリアのものより多く、日本にきたころから気になっていました。ある日本のチョコレート菓子は、チョコレートにたどり着くまでに外箱と2つのプラスチック製の袋があります。それに対し、大きさも量も同じオーストラリアのものは、プラスチックで包装されているだけで、中の袋はありません。

企業は、きつと消費者の好みや食べ方を調べた結果、そのパッケージを選んだのでしょう。包装の方法を選んでいるのは企業ですが、消費者が安心する、

つまり買った人が求めているパッケージなのです。

確かに菓子の包装によって商品がきれいに見え、衛生的な面では安全に見えます。でも同じ商品が、海外では質素なパッケージでも消費者が安心して食べられていると考えると、日本の包装の仕方は過剰で、無駄が多いように感じます。

ごみを減らすという動きの中で、シャンプーなどの詰め替え商品に力を入れている企業もあります。大府市を始め多くの市町村で、レジ袋の削減を目標に、消費者に買い物をサポートするように呼びかけています。さまざまなところで企業も消費者も行政もごみの減量に努力しているのに、なぜか菓子などの食品の包装を減らすという声をほとんど聞かないことは、とても不思議です。

ごみの量も減るし、体重も減ると考えると、私はそろそろ菓子も冷凍食品も卒業すべきなのですが…。

アダム見聞録

ADAM・KENBUNROKU



国際交流員 アダム・シモンズ



▲新年の抱負を書くアダム

『広報おおぶ』2009年1月1日号

ドキドキの義理チョコ

日 本に来てはじめてセント・バレンタインデーでチョコレートをもたらしたのは、10年前、幼稚園で働いていたときでした。母国のオーストラリアのバレンタインデーは、日本ほど盛大に祝われていないこととその日に何かをもたらした経験がなかったで、かなり驚きのバレンタインデーでした。

幼稚園では、私を含めて男性職員全員が多くの女子園児にチョコレートをもたらしていました。また、一人の女性職員にももたらせて、かつてバレンタインデーに何ももたらなかったたので、少しドキドキしました。もしかしたら…と思ったら別の女性職員にも渡されました。続々と女性職員からチョコレートを渡され、こんな顔でも日本で意外ともてるのかも、と少しうれしく思いました。チョコレートをくれた職員は、若くて独身の人もいれば、既に結婚している人も、子持ちの人や園児の母親もいて、驚きました。その結婚相手に睨まれることを恐れ、本当に受け取っていいかわかりませんでした。

オーストラリアでは、バレンタインデーは恋愛感情を持っている相手や恋人、夫婦などが、相手に気持ちを表す日として考えられ、チョコレートだけでなく、カードや薔薇の花、宝石などをよく贈ります。また、女性からだけでなく男性からもプレゼントを渡したり、交換しあったりするので、3月14日のホワイトデーはありません。

チョコレートのせいで女性職員の配偶者に恨まれ、日本から追放させられたら困るという悩みを同僚に相談したときに、「義理チョコ」の存在を初めて知

りました。その同僚によると、その年、今回もらった量は前年より少なかったものの、毎年2月14日に多くの義理チョコをもらうという話でした。それを聞いてホッとした反面、少し寂しいような気持ちになりました。

誰かに何かを贈られることはいつもうれしいことです。特に、その贈り物がチョコレートならなおうれしいです。しかし、何年日本に滞在していても、義理チョコという習慣に今でも違和感を感じています。お中元など、さまざまな場面でプレゼントを贈り合うことが日本の文化の大事な一部なので、多くの日本人はバレンタインデーに義理チョコを贈ることも認めているかもしれません。

育った環境の影響もあるかもしれませんが、私は義理で渡されるものより、ドキドキさせられるチョコレートが好きです。

アダム見聞録

ADAM・KENBUNROKU



国際交流員 アダム・シモンズ



▲義理チョコを渡され、対応に困惑するアダム

『広報おおぶ』2009年2月1日号

誇りを持つ市民

1 月29日から2月5日まで、大府市とポート・フィリップ市(以下ポ市)の姉妹都市提携15周年

を記念し、公式訪問団の一員としてポ市を訪れました。

ポ市の魅力の一つは、いつ、何度行っても、必ず新しい発見があることです。夏(12〜2月)は特に賑やかな時期です。ポ市は、ポート・フィリップ湾に接する海辺の街のため、メルボルン周辺では有名な観光地で、遠くから海水浴やマリンスポーツを楽しみに来る人で賑わっています。特に1月末から2月の中旬まで開催されるセント・キルダフェスティバルでは人気ミュージシャンのライブや踊りなどのパフォーマンスを見るために多くの人が訪れます。

フェスティバルのイベントの一つにプライドマーチというパレードがあります。このプライドマーチは、同性愛者が地域社会の一員として誇り(プライド)を持つためのイベントですが、参加者や見物人は同性愛者に限られるわけではありません。

オートバイに乗った大勢のカップルの登場で、パレードが始まると、その次に行進してきたのはフランク・オコーナー市長をはじめ、ポ市の市議会議員や市職員のグループでした。約40人のグループの内、何人が同性愛者かはわかりません。しかし、毎年変わる市長自身が同性愛者か否かに関わらずマーチに参加します。市や市議会という組織として、すべての住民の人権を尊重しているように思いました。

また、パレードを見守る見物人の態度が印象に残りました。パレードが始まる数十分前に行進ルートを歩いていたら、多くの人がルートの両側に並んで待っていました。

アダム見聞録

ADAM・KENBUNROKU



国際交流員 アダム・シモンズ



▲プライドマーチに参加する市議会議員や市職員のグループ

た。見物人の中には、小さい子連れの家族や年配の夫婦が、まるで日本の花火大会のように、折りたたみ椅子で座る場所を確保して、楽しそうに待っていました。パレードが始まると、見物人が行進する人びとを見下しているような様子はなく、声援を送ったり、拍手したりして励ましていました。ポ市では同性愛者は見せ物ではなく、その地域の住民として認められ、多様なポ市民の大事な一員とされていることがよくわかりました。

オーストラリアには同性愛者が多いと日本人の知人にときどき言われますが、日本でもポ市と同様なプライドマーチが毎年のように開催されており、多くの同性愛者が参加しています。マスコミに大きく取り上げられないので、それを知る機会が少ないことがそうした認識を生んでいるのではないかと思います。オーストラリアと日本の違いは同性愛者の人数より、行政や地域住民の理解のレベルにあるかもしれません。

『広報おおぶ』2009年3月1日号

山火事の思い出

2

月上旬にポート・フィリップ市を訪れていたとき、テレビでビクトリア州の東南部で発生した山火事のニュースを見ました。日本で頻繁に発生する地震と同じように、オーストラリアで山火事は毎年夏に発生するので、そのニュースはあまり気になりませんでした。日本に戻ると多くの方が、家族やポート・フィリップ市、コアラなど山火事による被害を心配してくれました。大した火事に思わなかったのに、日本でも取り上げられていると聞き、驚きました。気になったので調べてみると、オーストラリアで見た山火事のニュースから新たな火事が何箇所かで発生し、猛暑や強い北風の影響で炎の嵐が荒れくるい、210人以上が犠牲となっていました。今回の山火事は、合計で約4500平方キロメートルの土地が燃えたと推定されています。

私が山火事を知ったのは小学校3年生の1983年の2月でした。そこは、メルボルンから約60キロメートル東方で、ユーカリの木に覆われた山に囲まれている牧草地でした。その日はちょうど私の誕生日で、学校が終わったら家族で映画を見に行く約束してくれました。とても楽しみにしていました。しかし学校に行ったら、山火事がその町に近づいてくる恐れがあるため休校となりました。家に帰ったら、母が風呂やバケツに水を溜めたり、庭にホースを出したりしていました。燃えている山から風で炎のついた枝葉などが運ばれ、家が焼けてしまう危険があるので、家族みんなで消火活動の準備をしました。近くの山火事の煙で空が茶色になり、誕生日に

学校が休みになった喜びが緊張に変わりました。幸い、私たちの町は無事でしたが、その日に75人が山火事で亡くなり、今年の山火事が起こるまで最多の犠牲者数を出した山火事でした。

予測できないことは自然の魅力の一つでありながら、その恐ろしさの一つでもあります。ユーカリの木は燃えるためのものと言ってもいいくらい可燃性の物質が含まれていることを考えると、ユーカリの木に囲まれる所で家を作ることにはかなり危ない行為に思われるかもしれません。でも住民の安全のために森を破壊してしまうと、その地域の自然の美しさがなくなるだけでなく、その他の特有の動植物の居場所もなくなり、生態や環境への害も出ます。人間の都合に合わせた「自然」に変えるより、自然の恐ろしい力も尊重しながら共存できる方法を見つけることの大事さを、今回考えさせられました。

アダム見聞録

ADAM・KENBUNROKU



国際交流員 アダム・シモンズ



▲ユーカリの木に囲まれたオーストラリアの牧草地

『広報おおぶ』2009年4月1日号

国際交流係改め 多文化共生係です

最

近、「多文化共生」という表現をよく耳にします。私の所属する文化国際課の国際交流係も4月から多文化共生係という名前に変わりました。

日本に来るまで、「国際交流」という表現の意味を考えたことはありませんでした。母国オーストラリアは、人口の約22%が海外で生まれ、世界各国から移民してくる人が多い多文化社会とされています。オーストラリア人は、わざわざ海外にいる人たちと交流をしなくても、日常生活の中でさまざまな人と一緒に勉強や仕事をしたり、遊んだりしています。その一方日本では、地域や住民の「国際化」や「異文化交流」のために外国人との交流を行政などが推進し、現在約1560の日本の自治体が、60以上の国の自治体と友好・姉妹都市交流を行っています。

日本人に「国際交流」のイメージを尋ねると、多くの人は国際交流協会などが開く、他国の伝統芸能の演奏や民族衣装の試着ができるような催し物、外国人の講師による言語や料理、文化を紹介する講座などのイベントでの外国人との交流を考えるでしょう。海外から来た人を自分の家で受け入れるホームステイも人気の国際交流の一つです。ここでの「国際交流」は、趣味のような感覚で、外国人と交流したいと思っている人が、イベントに参加したり、ホストファミリーになったりしていることを意味している気がします。

現在よく使われる「多文化共生」の「文化」は美術、芸術、文学などの意味だけではなく、言語、習慣、宗教など、出身地や育った環境によって異なっ

てくる生活様式全体のことを示しています。そして、さまざまな国から来た人びとがそれぞれの「文化」の違いに優劣をつけず、違いを認め合って共に生活することを「多文化共生」と言います。

「多文化共生」は、外国から来たお客さんとの趣味的な楽しい交流だけでなく、外国人を日本人と同じ地域の住民として認知した視点を示します。外国人と交流したい人がすばいだけでなく、まだ日本人だけがするものでもありません。今年3月末の時点で2445人の外国人が住んでいる大府市でもほとんどの日本人住民が日常生活の中で外国人住民とさまざまな形で触れ合っているのが現状です。

「国際交流」から「多文化共生」という意識や視点を持つことで、外国人との交流のみならず、市民の多様性を尊重し、すべての市民が安心して暮らせる大府市を目指します。

アダム見聞録 ADAM・KENBUNROKU

国際交流員 アダム・シモンズ



▲ 4月から国際交流係改め多文化共生係

『広報おおぶ』2009年5月1日号

ジェーンさん来日

大

府市とオーストラリアのポート・フィリップ市（以下ポ市）の姉妹都市交流はさまざまな形で行われています。長年継続してきた交流事業の1つは職員交換派遣事業です。姉妹都市に派遣された職員は、現地の市民と交流を深めるためのプロジェクトを企画し、実行します。この事業の一環として、ポ市職員のジェーン・ダーレンバーグさんが6月下旬から3カ月間、本市を訪れます。ジェーンさんはどんなプロジェクトをする予定か、自己紹介を兼ねて教えてもらいました。

ジェーン・ダーレンバーグと申します。ポ市で働き始めてから3年半が経ちます。市内のレストランやまつりで料理が衛生的に安全に扱われているかを検査したり、調理師の指導をしたりしています。予防接種や理容室、美容院や彫り師の店の検査などで感染症管理にも従事しています。

ポ市で採用される前は、シェフをしていて、料理指導をしていました。食べ物が好きで、日本料理について学びたいです。大府市民お気に入りの食事処に行くことを楽しみにしています。日本料理の伝統的な調理法を少しでも覚えられたらうれしいです。大府市では、料理講座を開き、簡単にできるオーストラリアの料理を紹介したいと思っています。多様な移民を受け入れている国なので、「オーストラリア料理」を定義することは難しいことですが、その多様性を料理講座で理解していただけたと思います。また、デザインや建築、手芸や織物にも興味があ

アダム見聞録

ADAM・KENBUNROKU



国際交流員 アダム・シモンズ



▲6月下旬から来日するジェーン・ダーレンバーグさん

り、編んだり縫ったりすることが大好きです。また、自宅の小さな庭などの狭い場所で、野菜などの植物の育て方を実験したりすることも好きです。棚などを使って高さを利用した「垂直ガーデン」であれば、狭い場所でも、植物の茂る庭を作ることが可能です。それによりベランダなどが美しくなるうえ、植えたものによっていい香りがしたり、ハーブや美味しい野菜が採れたりします。いろいろな植物を育てることは本当に楽しいです。大府市の皆さんにどんな小さな場所でも植物を育てることができると楽しさを紹介したいと思います。

これまで幾つかの国を旅行してきましたが、日本を訪れるのは今回が初めてです。日本を探検して、たくさんの人びとに出会って、その人生について聞かせてもらい、日本の文化や生活を吸収できることを楽しみにしています。

『広報おおぶ』2009年6月1日号

消えゆく歴史

最

近、愛媛県の松山市を訪れました。長年日本で生活していても、日本国内の旅行はあまりしておらず、今回、初めて四国へ渡りました。

1日目は路面電車に乗り、松山城、道後温泉、坂の上の雲ミュージアムなど、見所豊かな松山市内を観光しました。2日目、松山市から特急電車^{ちくそう}で25分離れた内子町に行きました。内子は木^も蛸^{たか}の生産地で、蛸の生産や海外輸出で財をなした人びとの立派な家が残る古い町並みがあります。その町並みは、約800年続き、江戸時代末期に建てられた家などが保存されたり、復元され、軒を連ねています。外観が昔のままでも、内部は、資料館や雑貨屋、食事処などになっている旧家もあります。また、今でも普通に住んでいるものもあり、住民が町の歴史に誇りを持っていることがよく伝わってきました。

内子の街を散策しながら、大府に來たばかりのことを思い出しました。そのころ、通勤で毎朝通る道に、古めかしい木造の家が何軒かありました。荒廃の状況は家それぞれで違いますが、その中で見慣れた人が見たら「ぼろ家」と思われるものを初めて見たときはフクフクしました。なぜかというところ、それが母国のオーストラリアの家の構造とも、最近市内でよく目にする家の構造とも違って、新鮮に感じたからです。また、その建物から数十年前の大府の雰囲気^{ふんぎ}を少し想像することができたからです。

侍文化に代表される江戸時代の日本に興味を持っている外国人観光客は多いと思います。時代劇から受けたイメージもいいのですが、私の場合、日本で

生活を始めてから、どんな時代でも調べてみれば面白い発見があるということに気がつきました。有名な武士や僧侶、軍人、政治家、その関係の出来事を考える「歴史」のみならず、一般の人びとの生活が、時代と共にどのように変わったかを見ることが、面白いです。

歴史的価値観も人によって違うものです。ずっとそこに住んでいる人の感覚と最近海外から来た人の感覚も違うでしょう。でも室町時代や江戸時代ほど「昔」じゃなくても、例えば昭和20年代、30年代にできた、今では近所のあの「ぼろ家」でも、地元の歴史的財産だと思えます。なくなってしまうたら、昔の町は人の記憶の中にしか残りません。新しい一軒家や集合住宅が増えていく中、少しずつ姿を消していく古い木造の家を、数十年前のまちの姿を想像しながら、少しでも長く見てみたいです。

アダム見聞録

ADAM・KENBUNROKU



国際交流員 アダム・シモンズ



▲内子の古い町並み

『広報おおぶ』2009年7月1日号

安心のマスク

も

うすく冬だなあと感じるのはいつ頃ですか？
私の場合、冬眠前の熊が、食べ物を探しに山から街へ出て、人を襲い、退治されたという報道を聞くと、これから寒くなる気がします。また、風邪などが流行し、マスクをする人の姿をよく見かけるようになると冬が来たなと感じます。

日本に来るまで、通常マスクを使う習慣がなかったで、医師や看護師が手術するときや、入院している患者が見舞いに来た人と会うときなど、病院内で使うものと考えていました。初めて来日したころ、電車の中で白いマスクをつけている人を見て、びっくりしました。地下鉄での忌むらしい事件から1年も経っていない当時は、あの事件の犯人がマスクをつけていたというオーストラリアで見た報道を思い出し、少し緊張しました。その後、いろいろな所でマスクをつけている人を見かけ、その実態を知り、これも日本の文化として考えるようになりました。

マスクをつけると安心するという心理的効果なのか、それとも空気で運ばれる病気の感染を防ぐ効果があるかどうかはわかりません。確実なのは、オーストラリア人より日本人の方が、マスクの「力」を信頼していることです。例えば、海外から帰って来た日本で最初の新型インフルエンザ患者が、ホームステイ先でマスクをつけなかったことを批判された報道がありました。しかし、このような報道の背景には、マスクへの信頼のみならず、他国でのマスクに対する考え方への理解不足があるのだと思います。ゲストである日本人が、オーストラリアのホーム

アダム見聞録

ADAM・KENBUNROKU



国際交流員 アダム・シモンズ



ステイ先で朝から晩までマスクをしていたら、ホストファミリーは健康に見えても病気がち…と勘違いされるでしょう。しかし、相手に気を遣って自分の風邪などをつつさないためにマスクをするという文化的背景を説明しても、多くのオーストラリア人は驚くでしょう。相手が風邪などをひいていても、目だけでなく、顔全体が見えた方が安心します。風邪やインフルエンザは、かかる運命ならかかるので、うつることやうつすことを恐れてマスクをつけるのは「他人との間に壁を作ること」と考える人がオーストラリアには多いようです。海外でマスクをつけて良いか悩む方は、現地の人たちのマスクの利用状況を見てから判断してください。

冬眠する方はいらつしやらないと思いますが、マスクをしてもいなくても、これからの寒い時期、お身体に気をつけてください。

『広報おおぶ』2009 年 11 月 1 日号

外国人客が来たら

最

近、岐阜県高山市を訪れたとき、多くの地元の方が、英語で対応していたことにビックリしました。海外から来る多くの観光客が英語で会話をすることから考えれば、当たり前かもしれませんが、日本での日常会話は、日本語ですべきと普段思っている私ですが、私の容姿に合わせて、頑張って英語で話しかけてくれる相手に、日本語で返すのは失礼にあたるのではないかと思い、日本語で話すことを控えてしまいました。

高山のような外国人観光客の多い所では、英語で対応できることは有効でしょう。一方、見かける外国人のほとんどが、観光客ではなく住民である大府では、同じように対応すべきでしょうか。

外国人に英語で対応することが親切に思われるかもしれませんが、大府に住んでいる外国人のほとんどは英語圏の出身ではないため、英語が話せる人は少ないです。私もフィリピン人やペルー人などの通訳を頼まれることがあります。英語が通じないと思ったら、日本語で用件を尋ねます。すると、日本語の方が、理解してもらえることが多いのです。

外国人を見て、日本語が話せないだろうという思い込みで対応するより、日本人と同じように日本語で対応してみてください。外国人住民の中には、何年も日本に住み、同僚や友人から日本語を覚えたり、一生懸命勉強したりしている人が多いからです。

もちろん、人によって日本語の理解力は異なります。もし、日本語が相手に通じていないと思ったら、相手にとってわかりやすい表現に変えてみてください。

い。例えば、「禁煙席・喫煙席」が通じないようなら、「たばこを吸いますか」と換えてみたり、「ご連絡をください」のような曖昧な表現を「電話をください」と換えてみたりすると、わかりやすくなるでしょう。日ごろ使っている表現ではなく、相手にとってわかりやすい表現を考えることは難しいですが、言葉の壁を意識し過ぎて諦めてしまう前に、やさしい日本語で相手と正確にコミュニケーションをとることが大事だと思います。

外国人と接する機会の少ない人はいるでしょう。外国人はまだ遠い存在で、自分には関係ないと考えている人もいるかもしれません。しかし、この地域でも外国人住民が増え続けている中、さまざまな場面で彼らに出会う機会も増えると思います。そのときが来たら、「英語ができない！」と慌てずに、優しい日本語と笑顔で対応してください。

アダム見聞録

ADAM・KENBUNROKU



国際交流員 アダム・シモンズ



▲外国人に日本語で説明をするアダム

『広報おおぶ』2009年12月1日号